混住寮の生活では何が学ばれているか

―レジデント・アシスタント（RA）の語りを中心に―

異文化間教育学会　第36回大会
吉田千春（明治大学大学院博士後期課程）

研究の背景〔大学の国際化〕

◆大学のグローバル化が急速に進展し、大学内における国際的な環境作りが求められている。

例）「内なる国際化」、「多様な留学生の受け入れ」など

◆中でも、留学生と日本人学生が共同生活を行う混住寮はグローバル人材育成の場として注目されている。

（リクルートカレッジメント2013、大学時報2013）

例）２０１４年度の文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援」の審査基準の１つに、混住寮の有無が挙げられ、新設計画が増加している。

研究の背景〔混住寮〕

◆混住寮は多文化生活環境の中で、寮のコミュニティに参加し、人間関係の構築、異文化衝突を乗り超える経験などを通して学生達の主体的な学びの場となりうる。

⇒教育的視点を考慮して運営されている混住寮はまだ少ない。

◆混住寮の研究には、次の2種類がある。

①混住寮の教育的効果、機能に着目した研究
　例）中村他（2006）、正宗（2015）など

②混住寮における留学生の対人関係構築のプロセスに焦点をあてた研究
　例）出口・八島（2008）、山川（2013）など

⇒混住寮の研究は数自体が少なく、留学生と日本人学生の学びや教育的意義に焦点を当てた研究はほとんどない。

研究の目的

混住寮をフィールドとし、次のことを明らかにする。

①多文化環境における「学び」とは具体的にどのようなものか。
②どのようなプロセスで「学び」が起きるのか。
③「学び」が起きる相互作用の実態と要因は何か。

➡教育効果の高い混住寮のあり方を提示する。
➡教室の中と外を一体化させた新しいカリキュラムを作成するための基礎理論を構築する。

本研究の「学び」の枠組み

『正統的周辺参加論』(Lave＆Wenger,1993)

学習を実践共同体への周辺的参加から十全的参加へ向けての成員としてのアイデンティティの形成過程と捉えている。

※『実践共同体』とは？

⇒あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技巧を持続的な相互交流を通じて深めいく人々の集団

⇒「学び」を知識の獲得や個人の内面的な変化としてだけではなく、社会的実践への参加を通した社会や人との相互作用と捉える必要がある。

従来の「学習」と正統的周辺参加論の「学習」の違い

〔表1〕従来の「学習」と正統的周辺参加論の学習の違い

従来の学習		正統的周辺参加論の学習
Acquisition metaphor （獲得メタファ）		Participation metaphor （参加メタファ）
Indivisual enrichment （個人の豊かさ）	Goal of learning （学習目標）	Community building （共同体の形成）
Acquisition of something （獲得すること）	Learning （学習）	Becoming a participant （共同体の参加者になること）
Recipient（consumer), （re-）constructor （知識を受ける者，消費する者， 再構築する者）	Student （学ぶ人）	Peripheral participant, apprentice （共同体の周辺的参加者，見習い）
Provider, facilitator, mediator （知識の供給者，世話人，媒介者）	Teacher （教える人）	Expert participant, preserver of practice/ discourse （熟達した参加者，先輩）
Property, possession, commodity （indivisual, public） （所有物，所持するもの・ されるもの（私的・公的に））	Knowledge, concept （知識，概念）	Aspect of practice/ discourse/ activity （共同体での実践・対話・活動）
Having, prossessing （持つこと，所有すること）	Knowing （知ること）	Belonging, participating, communicating （共同体に所属，参加，コミュニケーションを行うこと）

The Metaphorical Mappings（SFARD 1998）（訳は筆者による）

八重樫、佐藤（2011）より抜粋

調査対象

①混住寮に住む寮生へのインタビュー

対象：混住寮において実践共同体に参加し、十全的参加をしていると思われるレジデント・アシスタント（以下、RA）

②寮関係者へのヒアリング

対象：寮の運営などに関わっている教職員、管理人

③寮の施設（構造）の視察

対象：主に居住スペース及び出会いの場としての共有スペース（建築学の専門家と共に調査を実施）

調査対象とする混住寮の選定

次の2つを基本条件として調査する混住寮を選定した。

①大学側が混住寮において、教育的目標（国際交流、人材育成など）を掲げていること。

②レジデント・アシスタント（以下RA）、ハウススタッフなどの組織があり、学生が主体的に寮の運営を行っていること。

調査・分析方法

◆多面的な分析を行うために、次の3つを組み合わせて分析を行う。

①KJ法（川喜多1986）
⇒個々の学びに関わる全体像を捉える。

②複線径路等至性アプローチ（TEA）（サトウ2009）
⇒「寮の実践共同体における周辺的参加から十全的参加のプロセス」を分析し、学びの実態とプロセスを捉える。

③グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）
(グレイザー＆ストラウス 1996)
⇒①、②の結果とともに、総合的に理論構築を試みる。

◆上記の分析を行うため、インタビューには次の2種類を用いる。
・ライフライン・インタビュー（川村2005、川島2007）
・半構造化インタビュー
※インタビューは同じ対象者に2回以上行う。

現在までの調査状況

現在、国内外の6つの大学において調査を実施した。
RAへのインタビューは9名（留学生4名、日本人学生5名）実施し、現在も継続中である。

	大学名	訪問回数	寮の視察	教職員ヒアリング	RAインタビュー（　）の中はインタビュー回数
1	Ａ大学（九州）〔私立〕	３回	約1時間	約1時間	◆留学生：2名（1名：3回／1名：2回） ◆日本人学生1名（2回）
2	Ｂ大学（東京）〔国立〕	３回	約1時間	約1時間	◆日本人学生：1名（2回）
3	Ｃ大学（東北）〔県立〕	２回	約1時間×2回	約1時間×2回	◆留学生：2名(1回) ◆日本人学生：3名(1回)
4	Ｄ大学（九州）〔国立〕	１回	約1時間	ー	なし
5	Ｅ大学（東京）〔私立〕	１回	約1時間	約３０分	なし
6	Ｆ大学（韓国）〔私立〕	１回	約1時間	約1時間	なし

A大学の混住寮〔概要〕

【場所】キャンパス内

【居住者】・留学生の1年生は全員入居を義務付けている
・日本人学生は審査有

【人数】約1200人
留学生：約66％（59ヵ国・地域）、日本人学生：約34％
〔2013年11月現在〕

【部屋のタイプ】①個室タイプ　②シェアタイプ（2人）

【特徴】
・食事提供なし。各フロアに共同コミュニティキッチンを設置。

A大学のRA〔概要〕

【人数】 64名　※半期ごとに募集

【RAの選抜】 書類審査、面接　※2セメスター以上の学生が対象

【RAの主な役割】

①フロアの管理、寮生のケアを行う。

②フロア、棟、寮の交流を促進するため、イベントを企画、実施する。

③毎週火曜日にRAミーティング（日・英2言語）、毎月1回フロアミーティングを実施する。

【RA研修】

セメスター開始前に約1週間の研修（1泊の合宿有）を行う。

内容はリーダーシップ、救命講座、ルームメイトの事例研究など

【その他】 奨学金として月2万円支給

A大学のRAへのインタビュー調査の概要

RA経験者3名（国内の留学生、留学生、日本人学生）に個別にインタビュー調査を行った。

名前	国籍	入学	RA経験	インタビュー回数	備考
Pさん	フィリピン	2012年9月	2013 年 9 月 ～ 2014年8月	**3回** （1回2～2時間半）	・**国内の留学生** ・入学時の日本語レベルは中・上級 ・小、中、高校は日本のインターナショナルスクール
Aさん	インド	2013年9月	2014年4月～現在	**2回** （1回2～2時間半）	・**留学生** ・入学時の日本語レベルはゼロ
Hさん	日本	2013年4月	2014 年 4 月 ～ 2015年3月	**2回** （1回2～2時間半）	・**日本人学生** ・入学時の英語レベルは中・上級（留学経験有）

KJ法の分析結果
Pさんの混住寮における学び（KJ図）

TEAで解明！

学びを促進するためには「省察」が重要！

「成長のために、質の高い リフレクションとフィードバックが不可欠だ。」

- リフレクションを共有することで、自分も寮生も寮全体も成長することができる。

など

循環

寮における学び

「混住寮は知識と経験が結びつき、新たな学びがうまれる。」

〔スキル〕

- 言語能力が向上した。
- 社会人としての対応ができるようになった・。
- 寮生に厳しく指導できるようになった。
- 企画力
- ファシリテーション力

など

〔価値観・考え方など〕

- ステレオタイプは誰でも消すことができる。
- 仲間との対話がアイデアを進化させる。
- 日常的に様々な国の人と話すことで、リアルな情報とその国の人の考え方や気持ちが分かり、自分に身近なこととして考えられるようになった。
- 自分のできることと限界が分かった。

循環

循環

寮は多文化環境で生きる実践の場！

多文化を意識して、主体的に様々な人とコミュニケーションをすることが寮の実践だ。

〔日常生活〕

- 色々なグループに所属したことで、世界中にネットワークができた。
- 日本語をできるだけたくさん使うようにした。
- 世界の時事ニュースを見て、友達と話すネタを常に探し、日々意見交換をしていた。
- ステレオタイプや国の違いは気づいた時にすぐにその国の人に確認することで、学びを深めるツールになっていた。

など

「RAとして、寮生と寮のために主体的に行動し、相手のことを考え、試行錯誤を繰り返すことが、実践と学びを生み出す。」

〔寮生のケア、管理など〕

- フロアの運営は波があるので、関係がよくなるように工夫した。
- 寮生のケアでは異文化衝突の解決、個別の相談への対応が大変だった。
- オフィスとのやりとりも多く、フォーマルなコミュニケーションを求められた。
- 最初、寮生にルールを厳しく指導するのは難しかった。
- 多国籍の人とのミーティングはファシリテートが難しかった。

など

〔イベントのリーダーなど〕

- カウントダウンイベントは熱があったが、やりきった。
- 大きいイベントのリーダーは企画、財務、寮生の管理まで全て経験した。

など

自分がロールモデルへ

組織の活性化

支え

寮の実践を支えていたのは「ロールモデルになる」という強いモチベーション

「ロールモデルとなる先輩がいたからこそ、成長できた。」

- 良いと思う先輩の行動や言動を常に観察し、真似をしたことで、自分も徐々にできるようになった。
- RAになりたいと思ったきっかけは、先輩RAへの憧れである。

影響

「自分の生活を考えず、限界までRAの仕事に集中したのは、ロールモデルにならなくてはという強い意識があったからだ。」

- RAは大先輩として、絶対に良いロールモデルにならなければならないと思う。
- RAのときは自分の生活を考えず、全力で仕事に集中したので、1年で悔いはない。
- RAは絶対疲れを見せられないので、イベント、寮生のケア、自分の生活のバランスをとるのが難しかった。

影響

「寮の秩序と平和のために、人をつなぐRAの力が重要だ。」

- この寮では、コミュニケーションが一番重要だと思う。
- 寮でのコミュニケーションを支えるものは、人が集まれる環境と、寮生をつなぎ、家族だと思わせるRAの力だと思う。
- 寮の言語はみんなが協力するために、日・英両言語が必要で、橋渡しをする役割がとても重要だと思う。

分析結果

３名のインタビュー調査とKJ法の分析結果から、次の３つの共通点が挙げられた。

A. 学びのプロセス（RAの役割の変化）

B. ロールモデルの重要性

C.「省察」の重要性（ショーン　２００７）

A：学びのプロセス（RAの役割の変化）
＜RAの新人から熟練へ（正統的周辺参加）のプロセス＞

RAは役割の変化にともない、十全的参加者となり、多文化生活環境で生きる熟練者に向けて、専門性を高めて成長していく。また、アイデンティティも変化していく。

寮生
半年～1年
（1年生）

- RAから指導、サポートを受け、寮生活に慣れる。
- RAに憧れ、RAをロールモデルとして見るようになる。

RA新人
半年
（1・2年生）

- 研修を受け、RAの基本的な知識を学ぶ。
- 先輩RAとペアになり、指示やサポートを受けながら、RAの仕事を遂行する。
- 寮生にとってはフロアのリーダー。RA組織では、経験の少ない新人。

RA一人前
半年
（2年生）

- RAの仕事を一通り経験し、先輩RAとなる。
- 後輩RAに仕事を教え、サポートする。
- フロアだけではなく、RA組織、棟リーダー、イベントなど、様々な場面においてリーダー的役割を担う。

RA中堅～熟練
（2年生以上）

- 1年間、RAの仕事を経験し、様々な実践知を持つ。
- RA組織全体のアドバイザー的存在。
- RA代表など、全体を管理する役割を担う。

B：ロールモデルの重要性＜ロールモデルからの影響＞

【寮生として】

〔Aさん（インド）〕

◆もしかしたら、バングラ人が僕のRAじゃなかったら、多分僕はRAなれない（なっていない）と思います。多分今国に帰って他の大学で勉強してたと思います。だから彼に会って良かったと思います。だから今僕の人生でも、今A大学の人生にもほんとに大切な立場を持ってます彼は。

◆僕は他の人のために働きたいです気持ちは自分のRAを見て生まれました。（自分のRAが色々してくれたから）それを返したい。だから続けたいです。みんなロールモデル見て尊敬して自分で続けてます。

〔Hさん（日本）〕

（先輩のRAは）すごかったなと思って。裏のこととか寮生だったから分かんないんですけどパッと見て寮生から見たRAとしてはすごい良かったなと思ってます。

〔Pさん（フィリピン）〕

僕の先輩もRAもみんなが性格がめっちゃ楽しいし、いつも笑顔で、誰でも笑顔で、僕は疲れてるんじゃないって思うときも、めっちゃ笑顔してるから、「すごいね」って思って、じゃあ、がんばりましょうって。

B：ロールモデルの重要性
＜RAは「ロールモデルである」という強い意識＞

【RAとして】

〔Pさん（フィリピン）〕

・俺が、寮生の前で間違える、絶対間違いができない。寮生の前で、絶対笑顔。絶対、疲れた顔見せない。

・(夜中の）12時から静かにならきゃいけないから、RAたちが俺たちのフロアで飲み会があったら絶対1時まで起きなきゃっていう。そういうルール基本はないですけど。

〔Aさん（インド）〕

自分がRAとして悪いことやったら、われわれの寮生にも迷惑を掛ける。（省略）RA組織というなんかもののイメージが悪くなる。RA全体のイメージが悪くなるから気を付けないといけないです。

〔Hさん（日本）〕

寮生のときってRAが大変なのは分かるんですけど、楽しそうってイメージ多くて、大変そうじゃなくて。見えなかったから何かすごいなと思って、自分もそういうのでなりたいって人も多いと思うから自分も、やっぱそうやってしていかなきゃいけないなって思って。

B:ロールモデルの重要性
＜混住寮におけるロールモデル＞

①RAとしての ロールモデル	例）リーダーシップの取り方、寮生への対応の仕方、自己管理の仕方、会議での発表の仕方など（全員）
②大学生としての ロールモデル	例）ディスカッションの深め方、意見の言い方、立ち居振る舞いなど（Pさん、Aさん）、大学生らしい服装（Aさん） 例）学習意欲の高さ、知識の豊富さ、人生の目標設定の高さ（Hさん※留学生をロールモデルとして）
③日本に住む外国人留学生としてのロールモデル 〔留学生→留学生〕	例）日本語学習の方法、留学生としての成長プロセス、日本での就職活動など（Aさん）
④日本語、日本文化についてのロールモデル 〔留学生→日本人学生〕	例）日本語の話し方、コミュニケーションの仕方など（Aさん）

➡様々なロールモデルを見つけ、観察し、よいところを取り入れてる

B:ロールモデルの重要性＜まとめ＞

◆Murphey and Arao（2001）

有名人や教師などの遠い境遇の人ではなく、より自分に近い境遇の人（年齢、民族性、興味、過去や現在の経験など）の成功した姿を見ると、自己効力感などが高まるとして、ニアピアロールモデル（near peer role modeling）を言語学習に活かすことを提唱している。

◆Murphey（2012）

多様性の高い環境において、ニアピアロールモデルを見つけることにより、幅の広い人間的成長が見られるとし、教室環境においても、多様性の高い環境を教師が作ることを推奨している。

B:ロールモデルの重要性＜まとめ＞

◆習慣、話し方、言語習得の方法などの日常的なレベルから、価値観、人生観に至るまで、様々なレベルでロールモデルから影響を受けており、自分の成長に合わせて、ロールモデルを変化させている。➡ロールモデルを見つけ、自分に取り入れる力も重要

◆多文化生活環境の混住寮は多様な学生が住んでいるため、自分にあったニアピアロールモデルを見つけやすい。また、自分の枠を超えた新たな発見が起こる可能性が高い。

◆生活を共にしているため、ロールモデルとする先輩にアクセスしやすい環境が整っており、身近に成功体験を見たり、聞いたりすることにより、自己効力感が高まりやすい。

C:「省察」の重要性＜省察の定義＞

◆ショーン（2007）

現場の複雑な課題に取り組んでいる専門家（例：教師、看護師など）は、どのような構造を持っているかをフィールド研究から明らかにした。

①行為についての省察（reflection on action)

実践やその時の思考について、行為の後又はその最中に振り返ること

②行為の中の省察（reflection in action)

不確実な問題や状況に対処し、状況との対話を行いながら対応していくこと

➡「行為の中の省察」が専門家の知の生成に重要な役割を担っている。

➡不安定で変化する複雑な状況においては、省察しながら柔軟に対応する省察的実践（reflective practice)が重要である。

C:「省察」の重要性＜学びを促進する要因＞

◆RAの成長のためには「省察（＝リフレクション、反省、振り返り、フィードバック）」が非常に重要である。

〔Pさん（フィリピン）〕

リフレクションがRAで大事。みんなも間違いがたくさんあるので、そこが一番でかい成長になる。間違っても大丈夫。それが1つの成長になる。間違っても、リフレクションをして次は絶対しないでという感じ。（省略）リフレクションがいっぱいあったので、気づきや反省がたくさんあった。

〔Aさん（インド）〕

失敗したりとか、何回あります。それが当たり前ですよ。完璧じゃないから。イベント企画してこれしましょうとか考えて、絶対できない場合もあるし、完全にできる場合もある。だからうまくできてもいいんだけど、そんなにうまくできなかったときにそのときにreflection?自分のやったことをreflectして、習ったことを一番役に立ってると思います。

〔Hさん（日本）〕

今回も、自分が他の人いなかったら言われなかったら分かんないこととかもあったし、反省のとき自分のこともちゃんと言ってくれる人がいるから自分の次のこと分かるとかもあるから、やっぱ、他の人の結構普段からサポートし合って考えてくれる人がいて成長していけるなと。

C:「省察」の重要性＜「行為についての省察」の例＞

【事例：シェアルームのルームメイトのトラブル（Pさん：フィリピン）】
シェアルーム（男子学生：日本人学生と留学生）の２人が騒音を巡って喧嘩になった。

＜Pさん（RA１期目：初期の事例）＞

〔１回目の対応〕

担当フロアの学生から呼び出しを受けたので、夜中に１人で問題のある部屋に行って対応した。

失敗　⇒　失敗の原因を省察（個人）⇒RAの友達と省察（対話）

〔２回目の対応〕 ※再び同じ部屋で問題が起こった

同じフロアの先輩RAメイトを呼び、２人で対応した。

⇒先輩の対応の仕方を観察しながら、前回の自分の対応について省察（個人）

⇒解決後、先輩RAとその日の対応の仕方について省察（対話）

⇒その日の対応について省察（個人）　⇒RAの友達と省察＆共有（対話）

⇒自分が最も尊敬していた元RAに相談し、省察（対話）

C:「省察」の重要性＜「行為についての省察」のまとめ＞

◆A大学のRA組織では「行為についての省察」について次の2つの特徴が見られた。

1）多様な方法、多様なレベルで「省察」の機会があること。

2）生活を共にしているため、他者との対話を通した「省察」が頻繁に行われていること。

	省察の機会	省察のレベル	媒体	その他
①	個人	インフォーマル	口頭・文書	
②	RA同士	インフォーマル	口頭	
③	先輩RA	インフォーマル	口頭	
④	元RA	インフォーマル	口頭・メールなど	
⑤	オフィスの職員	フォーマル インフォーマル	口頭・文書	
⑥	フロア会議	フォーマル	口頭	月1回実施
⑦	RA会議	フォーマル	口頭	週1回実施（RA全員）
⑧	報告シート（WEB）	フォーマル	文書	イベントを実施時
⑨	事例シート	フォーマル	文書	特別なケースのみ

・経験と省察の反復により、実践する時に必要な「選択肢」が増える。
・状況に合わせて「選択肢」から必要なものを選ぶことができるようになる。

C:「省察」の重要性＜「行為の中の省察」の例＞

＜事例：シェアルームのルームメイトのトラブル（Pさん：フィリピン）＞
シェアルーム（男子学生：日本人学生と留学生）の2人がコミュニケーションの問題で喧嘩になった。

＜Pさん（RA2期目）＞

・2人をまず落ち着かせるために、水を飲ませ、それぞれのベッドに別々に座らせ、個別に話を聞く。

⇒新たなペアに起きた初めての問題なので、状況を確認する。

・2人の話を聞き、相手の言語、性格、状況に合わせて言い方を変えたり、対応の仕方を変えたりして、問題解決を行った。

・最終的には、2人と一緒にお互いの妥協できるルールを見つけ、ルール作りを行うことで、解決した。

⇒その時起こっている状況、自分と対話しながら、今までの経験をもとに、柔軟に対応を行っている。

選択肢を組み合わせたり、変容させたりして、実践に最適な組み合わせを編み出すことができるようになる。

C:「省察」の重要性
＜「行為についての省察」と「行為の中の省察」＞

◆RAは、日常生活の中で、日々のフロアの管理、イベントの企画などを行うことにより、常に様々な問題、新たな課題に直面し、実践を行っている。

➡不確実な状況における実践の機会が豊富で多様

◆先輩や仲間と協働で課題や問題に対応し、「行為についての省察」を常に言語化しながら共有している。

➡良いモデルを観察する機会が豊富

➡実践知を豊富に蓄積することができる

➡暗黙知を言語化するトレーニングが日々行われている

⇩

選択肢を組み合わせたり、変容させたりして、実践に最適な組み合わせを編み出すことが可能になり、「行為の中の省察」ができるようになる。

今後の研究について

◆ライフラインインタビューをもとに、複線径路等至性アプローチ（TEA）を用い、初心者から熟練者になるためのプロセスを詳細に分析する。また、９名のインタビューデータを取りまとめ、径路の類型化を試みる。

参考文献

川喜多二郎(1986)『 KJ法―渾沌をして語らしめる』中央公論社

川島大輔（2007）「ライフレビュー」『質的心理学の方法―語りをきく』 新曜社

河村茂雄編著（2005）『フリーター世代の自分探し』 誠信書房

サトウタツヤ（2009）『TEMではじめる質的研究―時間とプロセスを扱う研究をめざして』 誠信書房

ジーン レイヴ，エティエンヌ ウェンガー(1993)『状況に埋め込まれた学習』 佐伯胖訳　産業図書

出口朋美、八島智子（2008）「実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係」『多文化関係学』p33-47

ドナルド・A・ショーン（2007）『省察的実践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考』 鳳書房

中村 展洋，伊藤 昭，今村 正治，小野 敏子（2006）「立命館アジア太平洋大学における国際学生寮の 教育的効果とレジデント アシスタン ト 養成プログラムの開発について」『大学共生研究』1,p139-151

バーニー・G. グレイザー, アンセルム・L. ストラウス（1996）『データ対話型理論の発見―調査からいかに理論をうみだすか』新曜社

正宗 鈴香（2015）「寮生活における留学生の異文化社会適応、人格形成、言語習得に関する事例研究―国際寮の教育的機能の可能性―」『麗澤大学』98, p63-72

八重樫文, 佐藤圭輔（2011）「プロジェクト学習（PBL）の授業設計・実践における背景理論とその評価」『環境・デザイン実習』の実践を通して」『立命館高等教育研究』11,p183-98.

山川史（2013）「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』38,p100-115

大学時報（2014）63(357)　日本私立大学連盟

リクルートカレッジメント(2013)「特集　寮内留学」リクルートカレッジマネジメント183, p4-32

Murphey, T. and Arao, H. 2001. “Changing Reported Beliefs through Near Peer Role Modeling.” *TESL-EJ* 5 (3): 1-15.

Murphey, T. 2012. “Autonomy, agency, and social capital: Surfing the altruistic coral reef cafés on a 40-mile layer of life!.” In *Proceedings of the JALT Learner Development SIG Realizing Autonomy Conference*, edited by K. Irie & A. Stewart, *Learning Learning [Special Issue]* 19 (2): p4-17